

## 江戸のアサガオ

樋口 幸男

(人間社会学部社会園芸学科)

### Japanese morning glory

HIGUCHI Yukio

#### 1. はじめに

アサガオは日本で広く親しまれている夏の鉢花で、小学校では理科の観察材料として栽培することから、子供たちにもなじみの深い植物である。このアサガオはヒルガオ科の植物で、学名を*Ipomea nil* と言い、奈良時代に遣唐使によって中国より日本に持ち込まれたものである。当時は観賞用としてではなく、下剤の材料として種子が利用されていたらしい。なお、近年、緑のカーテンの材料として良く利用されるアサガオは本種ではなくソライロアサガオ(*Ipomea tricolor*)で、園芸上は西洋アサガオの名で流通している。

このアサガオ、江戸時代には現在普通に見ることができるアサガオからはとても想像もつかない、奇抜な花形や草姿の品種が多数育成されていた。今回は江戸時代に発達したアサガオの品種群を通して、当時の園芸文化を顧みたい。

#### 2. 江戸のアサガオ

まず、アサガオの基本種の形態的特徴であるが、葉は3つの翼片を持ち、茎は支柱等にらせん状に巻きつきながら生育する。花は5枚の花弁が癒合したもので、円錐状の合弁花は正面からは円形に見える。これらの特徴は、葉に関しては並葉、花に関しては丸咲と呼ばれている。奈良時代にアサガオが持ち込まれて以降、江戸時代中期まではアサガオの形態に大きな変化はな

く、今、私たちが普通に見ることのできるアサガオと同様の花形、草姿をしていた。しかし、江戸後期の文化・文政期になると第一次アサガオブームが到来し、多様な形態のアサガオが誕生した。当時の品種の様子は「花壇朝顔通」などの図譜により知ることができる。

文化・文政期のアサガオに見られる変化であるが、まず、葉に関しては野生種と同じ並葉と呼ばれる形状の他、翼片のない丸葉、フヨウの葉のような形態の芙蓉葉、翼片が無く長細い柳葉などの形態的な変化に斑入りが加わった。花に関しては、基本種と同じ丸咲のほか、花冠がキキョウの花のように切れ込んだ桔梗咲、花冠が大きく開かない竜胆咲や筒咲、花卉が増えた孔雀八重や牡丹咲などが加わった。これら、葉と花の形態に加え、花色の変化も加わることで品種数は一気に増加し、「花壇朝顔通」だけでも180品種が記載されている。しかし、文化・文政期に発達したこれらの品種群は野生種と比べると大きく変化しているとはいえ、まだアサガオの面影を残した品種が大半を占めていた。

江戸のアサガオが飛躍的に発展したのは第二次ブームとなる嘉永・安政期である。この時代のアサガオは前述のような品種に加え、さらに形態的に大きな変化が加わり、もはや誰も一見しただけではアサガオとわからないような品種も多数登場するようになっていった。例えば、葉に関しては糸柳や針と呼ばれるような極端に細長いものや、縮緬南天と呼ばれるもののように複雑に切れ込み、縁が反ったり湾曲したりする変異が出現した。また、花に関しても同様に、細裂した細切采咲や、さらにその細裂した花卉が管弁化した管弁獅子咲牡丹と呼ばれる変異が出現し、さらには茎に関しても通常のつるではなく、帯化(石化)したのもなども現れ、古典園芸植物の中でも特にユニークな品種群が生み出されていった。

### 3. 変化アサガオの遺伝と採種

江戸期のアサガオで特筆すべきは、その採種・系統維持の方法であろう。まず、文化・文政期の品種群までは前述したように形態的にも野生種の面影を残しており、そうした品種は種子稔性も失われていない、いわゆる正木と呼ばれる系統であることから、品種の維持は特別難しいものではなかったと

思われる。しかし、嘉永・安政期に発達した、野生種の面影を残さないほどの形態的变化を有した品種の多くは、種子稔性のない、いわゆる出物と呼ばれる系統で、それ自身は次世代の種子を残せないものなのである。それでは、どのように出物の系統を維持していたのか、ということであるが、実は全く同じものを確実に得る方法はないのである。出物の形質は劣勢ホモで発現するので、その遺伝子をヘテロで持つ正木から種子を採り、それを蒔いて、子葉の形態から出物を選抜し、それをその世代の観賞用の個体として育て、正木も次世代の採種用に一定量は残すという、大変手間のかかる作業をしていたのである。江戸時代という遺伝学の知識のない時代に、このような繊細な作業が求められる品種育成が行われていたことは驚愕に値するものであり、当時のアサガオ愛好家の観察眼の素晴らしさと変化アサガオ作出に対する情熱を感じることができる。

ちなみに、このアサガオに限ったことではないが、江戸時代に発展した古典園芸植物すべての品種育成にあたっては、人の手による交配は一切行われていなかったことが知られている。欧米における植物の品種改良が古くから人工交配を用いていたのに対し、人工交配なしに数多くの植物で多用な品種群を生み出した江戸の園芸は、世界の育種の歴史の中でも極めて特殊なものであった。

#### 4. 現代の変化アサガオ

江戸時代に大きく発展した変化アサガオの世界であるが、当時の遺伝子は現代も引き継がれ、遺伝子の解析も進んでいる。そして、近年、変化アサガオの持つ形質にはトランスポゾンという特殊な遺伝子が関与することが明らかになってきた。動く遺伝子とも言われるトランスポゾンは特殊な配列をもったDNAであり、核内にあるDNAに組み込まれているのだが、細胞分裂の際に一旦核DNAから離れて同じ核DNAの別の場所に入り込む。そして、このトランスポゾンがDNAの遺伝情報を有する部位に挿入されると、その遺伝情報が無効となり、その部位が世代交代を経てホモ化した場合に形質の変化という形で表れるのである。こう書くと難しいかもしれないが、身近な例では一株で色々な花色の花が咲くことがあるオシロイバナを思い浮かべて

いただくと理解しやすいかもしれない。オシロイバナにおいてもアサガオ同様にトランスポゾンの存在が知られており、これが動くことで同じ個体であるにも関わらず花の色が異なるという現象が起こるのである。

アサガオはこのように遺伝学的にも大変興味深い植物であることから、文部科学省のナショナルバイオリソースプロジェクトの保存対象生物に指定され、九州大学を中心に研究と遺伝資源の保全が行われている。

## 5. 珍品・奇品の園芸の背景にあるもの

江戸時代に発展したアサガオ、フウラン(富貴蘭)、セキコク(長生蘭)、オモトなど、多くの古典園芸植物と呼ばれるものは、前述したように野生種とは大きく形態の異なる、いわゆる珍品・奇品と呼ばれる品種が多く存在し、本来は美しい花を咲かせる植物であっても、斑入りや形態の変った葉を觀賞することを目的に栽培されていたものが多く存在していた。これら珍品・奇品と呼ばれる品種の多くは、趣味家以外の人々には普通種と比較して良さが理解し難いものも少なくない。さらに、そのような植物は普通種に比べ、栽培が難しいものも多い。今回取り上げたアサガオは、栽培そのものは難しくはないが、採種、系統の維持という点ではとても手のかかるものであった。それではなぜ、江戸の人々はそのような、ある意味厄介な品種に熱をあげたのであろうか。私はその理由を、江戸の園芸の担い手の中心が男性であることが深く関係していると考えている。

そもそも男性という生物は女性と比較して、自分以外の男性と競いたがる傾向が強い。実はこうした習性は人に限った事ではなく、多くの動物の雄に見られることである。雄の中でも一際強い雄がより多くの雌を獲得し、子孫を多くのこすことができるので、雄は雄同士で争うのである。

一方、人は本能だけで行動する生物ではなく、婚姻制度もあるため、動物のような行動をとる必要性はもちろんない。しかし、にもかかわらず、雄同士で競い合うという本能はおそらく失われずに残っているのだろう。園芸でも釣りでもゴルフでも、男性の仲間同士で仲良くやっている趣味の活動の中でも、良く観察すると仲間同士で競い合っていることが見えてくる。その際、同好の仲間に敵対意識があるとか、仲間内で自分が一番女性にもてたいとい

うようなことを考えているということではなく、ただ単純に、無意識のうちに競いあっているのである。従って、男性の園芸愛好家にとっては栽培が難しく、自分だけが栽培を成功させているとか、高価であったり珍しかったりする品種で自分だけが所有している、といったことが、万人受けするか否かということよりも重要なのである。こうした男性の特性が、江戸における珍品・奇品の園芸文化を発達させた一番の原動力だったのではないだろうか。

江戸時代には植物ごとに連と呼ばれる愛好家グループが存在しており、色々な品種を手に入れるには連に加入することが早道であったが、その場合も加入したてのころは入門者向けの品種からスタートし、希少性の高い品種は連の中でキャリアを積まないと分譲してもらえないようになっていたらしい。こうした仕組みは園芸文化の発展という視点からみると一見ネガティブに働くようにも見える。しかし、私はこうしたシステムこそが、その品種を持っているものに優越感に似た感情を生じさせ、多くの珍品・奇品が育成・維持されたことにつながったのではないかと考えている。もし、多くの品種が自由に取引され、だれでも手に入れることができるようなシステムであったのなら、その品種を持つことで他の愛好家に対して優越感を感じることもなくなり、結果として品種を維持しようというエネルギーは失われてしまうのであろう。

## 6. おわりに

今回は江戸時代に発展した古典園芸植物の中から、一般の方々にもなじみのある植物ということでアサガオを取り上げたが、江戸時代には今とは全く趣の異なる園芸が幅広い層の間で楽しまれていた。園芸は今でこそ世界中で広く一般の人々に楽しまれているが、江戸時代の世界を見渡すと、園芸は皇族や貴族など、一部の支配層が楽しんでいただけで、決して庶民が楽しむものではなかった。では、なぜ江戸時代に、遺伝の知識等もなかった日本で、世界に先駆けてこれほどまでに庶民の間にまで園芸が広まったのであろうか。それには、徳川将軍家が園芸好きであったとか、園芸化できる植物がとても豊富であったとか、下町には鉢を作る材料の粘土が豊富にあったなど、多くの背景があるが、一番のポイントは江戸時代が戦乱のない、平和な時代

であった、ということである。平和な時代であったからこそ、身分の区別なく、花のように生きるための必需品ではないものに熱を上げ、色々な品種を栽培し、観賞するという文化が根付いたのであろう。今、園芸を楽しんでいる私たちもその背景にある「平和」の大切さを忘れずにいたいものである。

## 7. 参考文献

仁田坂英二 2014 変化朝顔図鑑 化学同人

中尾佐助 1986 花と木の文化史 岩波新書

国立歴史民俗博物館 1999 伝統の朝顔

国立歴史民俗博物館 2000 伝統の朝顔Ⅱ



茎が帯化した斑入り個体



花弁が裂けてナデシコの花のように見える撫子采咲



花弁が細裂した細切采咲



牡丹と呼ばれる八重咲